

<卒業論文小特集>小川国夫論

著者	野田 まり
雑誌名	日本文学誌要
巻	29
ページ	48-61
発行年	1983-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019376

小川国夫論

野田 まり

序

昭和四十年、島尾敏雄が書評で『アポロンの島』を取り上げるまで、小川国夫の文学は全く日の目を見なかったと言ってよい。彼が作家として文壇に名を連ねるようになったのは比較的最近のことだ。小川の文学は、その方法と内容の特異なことで注目を集めてはいるが、その評価は量的にも質的にも必ずしも充分ではない。彼が独自の方法や内容で文学を営んでいるのであれば、その方法や内容について、もっと深く、各方面から考察がなされてよい筈だ。——このような考えから、私は、拙いながらもここに小川国夫論を試みようと思う。

小川国夫は、人間の「生」あるいは「死」というものについて独自の見解を示している作家である。その見解とは、△癒える▽ため生きる、ということだ。私は人生を生きる一人の人間としての小

川国夫にスポットライトをあて、△癒える▽とはどういうことか、なぜそのような見解を抱くに到ったのか、それはキリスト教とどんな関係があるのか、そして小川国夫の文学とは結局何なのか、ということを、「試みの岸」という作品をみながら考えていこうと思う。本文中ではⅡの「△治癒▽に向かう文学」において展開されるものであり、この小論の大きな柱になる。

ところで小川は、表現についても独自の方法を駆使している作家であり、作品の内容を吟味する前に、是非ともそのことに触れておかなければならない。そこでまず、表現の問題について述べようと思う。Ⅰの「言葉へのファナティスム」がそれにあたる。

また小川国夫は「内向の世代」の一人に数えられているが、特徴を指摘し命名するということだけでなく、彼がなぜ「内向」なのかという原因についてここで考察しようと思う。そうすることによって、文学全体の中で小川国夫の位置が、より明らかになってくる

であろうと考えるからだ。これは、Ⅲの「小川国夫の『内向』」で述べるつもりである。

以上のような訳で構成は三部に分かれるが、それぞれが小川国夫という作家の独自性を三方から照らしてくれれば……と思う。

小川国夫の作品には三つの系列がある。一つは半自伝的な作品の系列、二つ目はフィクションの系列、三つ目は聖書をパターンとした寓話の系列である。本文で作品を取り上げるにあたっては、それぞれの特徴を生かして、Ⅰでは初めの系列を、Ⅱでは二つめの系列、Ⅲでは三つめの系列を中心に述べることにする。

I 言葉へのファナティスム

火喰鳥に石を投げると、眼は宙を短く裁断するように動いて、石の動きを追い、地面からそれをくわえ上げて、嚥んだ。石が大きい場合には、垂直に伸ばした頸の中をそれが通過して行くのが判った。浩はその都度後悔しながらも、歯止めが利かなくなつて悪さを抑えることが出来ず、石を投げ続けた。彼が感じたのは、鳥の胃に、一粒一粒罪を積んで行く、ということだった。

これは『彼の故郷』に収められている「火喰鳥」の一節であるが、鳥の動作の鮮やかなイメージと、主人公の少年の微妙な心理が、簡潔な、即物的な文体で見事に表現されている。これはほんの一例だが、小川国夫という作家は、どの場合でもこのような表現方法を採る。鳥の様子を一々微細なところまで書き込んだり、少年の心理を修飾語を多用して説明するようなことはしない。ある「言

葉」の存在を鋭く研ぎ澄ませてそれを的確に文章の中に配置することによって、表現しようとする対象を揺るぎなく描き出すのである。

ある対象を充分に表現しようとする場合、それを言葉によってあらゆる角度から説明しようとするのが一般的な方法であろう。つまり、対象を外側から眺めてその形態についての言葉を並べたてるのである。このような表現方法を、仮に饒舌の方法とでも名づけておこう。例えば、鷗外の「舞姫」のエリスの容貌の描写などがそれにあたる。

だが、この饒舌の方法によってでは、言葉は対象の輪廓を撫でているに過ぎない。どんなに言葉を尽くした表現でも、それは対象に限りなく近づこうとも対象そのものには決してなれないのだ。この場合、言葉は輪廓を構成する部品、対象を説明するための道具である。

私たちが日常使っている言葉というものは、ある物（実体のないものや抽象的なもの、また状態や動作という意味も含めて）に対応してそれを物自体によらずに指し示すための道具である。「りんご」や「蛇」などの形を具えた物ばかりか、「思考」とか「歩く」などの抽象的な事柄や動作さえも、言葉によって指し示すことができる。これは言葉と指し示す物との対応が共通の認識によって約束されているから可能なのであり、いわば普遍的な意味による用法である。

ところが、私たちが言葉を憶えたり使ったりするときには特殊な状況の下でなされるのが実情である。それゆえ、それぞれの情況に

よって同じ言葉でも微妙に内容が違ってくる。それぞれの場における特殊な意味が付随してくるのだ。特殊な意味とは、普遍的な意味以外の揺れ動くイメージだと言ってもいい（このイメージがまた共通の認識を得れば、それは派生した意味として定着し、抽象的な意味や含蓄を示すことになる）。このようなイメージを持った言葉は、辞書の中に眠っている言葉と違い、人間に実際に使われることによって文脈や会話の中で息づく。それぞれが情況の中で特殊な意味を帯び、生きた言葉として語られるのだ。

小川国夫が用いるのは、このような生きた言葉、中でも特に鮮烈なイメージを伴った言葉だ。このような言葉は、もはや単に物を指し示すだけの道具としての働きを超えて、人間をしてイメージを喚起させるだけの力を持った、いわば主体性のある言葉である。彼は言葉に付随するイメージ（「実感」という言い方をしている）を生かすために、その主体性を利用するのである。

小川国夫の方法は、説明ではない。むしろ説明を一切省いてしまふ。彼は描こうとする対象を、そっくりそのまま言葉に置き換えて提示してみせる。つまり言葉は、対象を説明するための道具として使われるのではなく、対象と同価値の「物」として、人間に働きかける主体性を持ったものとして置かれるのだ。説明は対象の輪廓をなぞるだけであるが、この方法だと、言葉は対象の内部に食い込んで、というより対象そのものになり代わって、対象がそこに在るのと同じ働きをする。対象がそれに対峙した人間にイメージを喚起させるように、言葉も、それを見たり聞いたりした人間にイメージを喚起させるようになるのである。小川の表現を借りれば、「 \wedge 物 \vee

を開示してくれる言葉」のことだ。

そうした場合、言葉は対象の外観を饒舌に飾りたてるようであってはならない。言葉は、「物言わぬ」対象と同様に、沈黙していなければならぬ。少しでも饒舌になったとたんに、「実感」を殺ぎ落としたただの道具に逆戻りしてしまうのだから。言葉は沈黙していることによってのみ、その主体性を発揮することができるのである。前の饒舌の方法に対して、こちらを沈黙の方法と呼ぼう。

私が願ったのは、言葉を対象にできるだけ近づけて、物と見まがう程にしてしまうことだった。それがうまく行けば、物が沈黙していて、それが想像をうながす場であるように、文章も沈黙して、想像をうながす場となるだろう。私は何よりも先にその種の場合が欲しかった。

（「文体論」）

饒舌は、公約という共通の承認を受けた、普遍的な言葉の意味の上に成り立つ方法だ。だから書き手や話し手の意図は、そう酷くは誤解されずに受け取られる。この場合の言葉とは、極端に言えば記号のようなものである。ところが、小川国夫のように沈黙という方法を採ると、言葉はある個人のある情況における「実感」という特殊な一隅に閉じ込めておかれるので、受け取る側の理解は得難くなる。沈黙という方法を採った場合、言葉は対象そのものになり代わって歪みない形をとることはできるが、その分伝達については相当の困難を抱え込んでしまう。そこで、表現上の洗練が必然となってくるのだ。文章においては、「文体」の問題である。

彼は「文体」というエッセイの中で、文体は、「本来の体臭のよいうな「情性的な」ものではなく、小説家の「意志の所産」でなければ

ばならないと述べている。そしてここで一例として夢を書くことを挙げて、それに二通りの方法があると言っている。一つは夢を現実と対応させて科学的に分析する方法、もう一つは「夢を夢として過不足なく表現」する方法である。前者は饒舌の方法、後者は沈黙の方法のことであろう。そして後者の文体について次のように言う。

「この場合、文体は危険な作業を強いられる。なぜなら、夢は無秩序で、死にやすいもので、粗暴な扱いがゆるされないからだ。見方を変えれば、文体というものは、このような危険な作業にさらすことによって、鋭さとニュアンスを増すのだから、小説家は本能的に、自分の文体をこうした局面へ追いこんでいるともいえよう。」

沈黙という、いわば伝達を拒否したような逆説的な方法によって対象を表現しようとするなら、情性で文章を綴っていたのでは作者の意図は伝わらない。あらゆる可能性の中のただ一つの表現によってのみ、無によって完全を表現するという逆説的な方法による伝達が可能なのだ。小川の文章を読んで、言葉が研ぎ澄まされた石のようだという印象を受けるのは、彼が常にそのことを試みているからに他ならない。

ところで方法や文体だけでなく、文章自体を小川はどう位置づけているのだろうか。言葉（一語）と文章とのバランスについて簡単に付け加えておこう。

「なぜ書くか」というエッセイの中で彼は、一質の良い言葉とは（中略）、或る脈絡の中にあつて、特徴的な響き方をした場合の言葉であろう。したがって、すべての言葉は、脈絡の中で聞かれ、値うちを測られなければならない。」と述べている。小川にとって、文章

は、「特徴的な響き」すなわち「実感」を放流する「場」なのだ。だから文章の展開とか論理性はさ程重要な要素ではない。「私は条理兼ね具えた文章に出合うよりも、その中で一語がかけがえのない力を示している文章に出合いたい。つまり、一語の方にはるかに重いアクセントを置くという意味なのだ。」と彼は続けている。彼において重要なのは、あくまでも言葉の呼び起こす鮮烈なイメージであり、文章はそれを最大限に生かすための情況に過ぎない。そこで要求されるものこそ、「危険な作業にさら」された文体であり、沈黙という表現方法なのだ。

そのようにして構築された文章が作者の意図したとおり成功したときに、言葉による表現の極みをみるのであり、言葉は力を持って威光を放つ。小川国夫は、道具ではない、生きた物としての言葉の力を復活させようとしている。それは、太古の人々の呪禱をも想起させる。

神はことばであるというほうがいいんじゃないですか。つまり、ロゴスでしょう。神はことばであるというのは、ことばに対する非常なファナティズム（注）ですね、ことばイコール神というんですから。（対談「原体験の周辺」）

この発言は、否応なく「ヨハネによる福音書」の冒頭の句を想起させる。宗教が、特にキリスト教が、言葉へのファナティズムの上に成り立っていることを思うと、彼がキリスト教徒であることに、深甚たる文学的意味を見出すこともできる。

このように小川国夫という作家は、言葉に対して並々ならぬ執着を抱いていて、そのような言葉の「実感」を、沈黙という独自の表

現方法によって伝達しようとする。それは彼の作品の三つの系列のうち「半自伝的作品」群においてとりわけ顕著である。というよりむしろ、この系列ではそのような「実感」こそがテーマになっているのだと言ってよい。初めに挙げた「火喰鳥」もその一例であり、彼の表現の独自性を、充分に示してくれるものであろう。

II 八 治愈Ⅴに向かう文学

小川国夫の作品を読んでいて屢々ぶつかるのは、「人並みになりたい」という呻きだ。例えば次のようなところである。

アシニリロムゾは自分の影を見ないで済むように、もっと大きな影の中に入りたかった。

彼は人並みになりたかった。だが、その湖岸の漁村は彼を締め出していた（傍点引用者、以下断りが無い限りこれに準じる）。

（『或る聖書』）

また、次のような言い方もしている。

銀三は十吉が留守の間、アオをあずかったのだった。（中略）

——済まないっけ。生き物をあずけたりして……。じゃあ、お前の家へ寄って、連れて行くからな。

——いつでも、大事にあずかるよ。だが、心配だなあ、お前がどうかかなりやあしないかと思つて。

——大丈夫、俺は人並みになるまで、くたばりやあせん。人足には、あさってから船へ来るようにいつてくれ。段取りをつけておくんて。

（『試みの岸』）

「人並みになりたい」という願望は、当然現状の人並み以下であることを示すのであり、劣等意識の裏返しである。劣等意識といわば負の値の大きさは、そのまま「人並みになりたい」という願望の大きさでもある。小川自身、強い劣等意識を抱いていたように、彼自身、「人並みになる」ことを切望している。

「人並みになる」というのと同じ意味で、小川は、「治愈」とか「癒える」という言葉をよく使う。

生きている人間は、今にも倒れそうによろめいている。だが死者は、静かな足どりで歩いている、とジュール・シュペルヴィエルはいう。そして、以下のように続けている。

死者たちよ

君たちは血液から癒えた

僕たちを渴かす

あの血液から

君たちは見ることから癒えた

海と空と森を見ることから

死者を癒えた者と見ている。そして、人間存在をこうした治愈にいたる道程として、この詩人は考えているのであろう。彼の生活の中には、いつも治愈を求める気持がひそんでいるのである。私はそのことに共鳴する。彼が人並みになりたいといっているように思えるからだ。

（『治愈力』）

「治癒」とは、字義どおりにとれば、病氣から恢復することである。小川は、「幼少のころから、病氣の間屋といわれた」と言う。事実、年譜(注2)には、こう記されている。

昭和四年 二歳(注3)

十二月、用宗海岸に移り住む。浜辺に出て陽を受けて遊ぶと、発熱して食欲がなくなる、弱い体質の子供だった。

昭和七年 五歳

九月、疫痢に罹り、重態となる。十月全快。

昭和九年 七歳

静岡市の司馬病院で脱腸の手術を受ける。

昭和十三年 十一歳

十二月十日発熱、二十四日のクリスマス・イヴに静岡市の北村病院に入院。病床で教会の鐘を聞いた。肺結核に腹膜炎を併発して、一時重態となる。

最後の結核のときはそのまま三ヶ月間入院、休学して二年間の自宅療養の後、昭和十六年の四月に六年生に復学している(病氣自体もそうだが、休学して人より二年遅れてしまったことが彼の劣等意識の大きな原因になっているようだ(注4))。この他にも風邪や下痢で始終医者通いをしていたというし、父富士太郎も結核を患っていた。小川は幼い頃から病氣を身近に、いや身内に持ってい、「死」というものを肌で感じていたのだろう。「今そのうちの結核の例をいうと、発見された時には、症状は相当に進んでいた。私の母は一度は息子の死を覚悟したし、私にもそれとなく判って、いく度か蒲団をかぶって泣いたおぼえがある。十一歳の初冬であった。」(「治

癒力」という。僅か十一歳の少年に、「死」は、どんな形相で迫ったのであろうか。「死」を意識できる程の精神段階にまで達していないというのは浅見だ。交通事故のような、不慮の、瞬間的な死ならいざ知らず、彼は以前からよく仰臥していたし、入院中には療友の死をみているのだ。

現実の「生」にしがみついているとき、「死」は、それこそポカリと口を開けた窺い知れぬ闇に違いないが、病氣という状態にあるのが平常になってしまふと、「死」は、病氣のすぐ隣りにあって、むしろ治癒と等距離の救いでさえある。これは病状が重くて死んだ方が楽だという平板な意味ではない。病氣という状態にあると、「死」がその延長上にあるということが理解され易いということだ。「死」は、自分との相対的な位置関係によって見え方が違ってくるのである。

小川は、「死」を、忌み避けるべき恐怖ととらずに、それを通り越して「救い」と受けとめた(そうなるまでに想像以上の苦しみがあったであろうことは言うまでもない)。やがて彼は癒えたのだが、その時の気持ちには、死に戦っていたときのように切迫したものではなく、余裕のある楽なものだったという。彼は「死」と融和しながら癒えたのだ。それで、その過程を充分味わうことができた。小川にとって治癒の過程は、世界が輝いて見える、最もすばらしい日々であった。治癒の実感こそが、彼の最も大きな原体験になっているのである。

やがて彼にとって癒えるVという言葉は、病氣から恢復するという意味を超越して、人生そのものに演繹されて解釈されるように

なる。病気という負の状態を、そのまま人生における自己の状態になぞらえて、「人並みになる」ことは、病から癒えることと同じだと受けとめるようになるのだ。そうすると、「死」は、△治癒▽が完了した状態、すなわち「救い」である。

このような考え方は、キリスト教の、罪を償う過程として人生があるものであり、人は赦されて死ぬ、という考え方とよく似ている。どちらも、人生は水準以下にあり、死によって初めて水準に達する、という構図を描く。「治癒」は「浄化」、「病」は「罪」と置き換えられるだろう。実際小川は十九歳で受洗したカトリックのクリスチャンである。

私が二、三回自分の考えを書いた△癒える▽という考えですね。これは人間というものは水準以下のところにあって、水準は目指すものだという考えなんですけれども、それは赦す赦さない、特に赦されるという意味に関係してくると思うのです。この考え方にキリスト教の痕跡を自分のなかに感ずるわけですからね。ほんとうにそう思っているので、人間というものは梯子をだんだん登って行くようなものじゃない。人並みになりたいわけだと。それに気付くのが文学だと。人並みになるという願望ほど強いものはない、だから文学的願望は強いんだと、そういうふうには思っていますね。

(対談「家・隣人・故郷」)

ここで注意を要するのは、小川の考え方はキリスト教(ここではアウグスチヌス以降のカトリックのこと)のそれによく似てはいるが決して同一ではないということだ。キリスト教では、人間は罪を持ったまま生まれてきて(原罪の考え方)罪を持ったまま赦されて

死ぬのであり、人生という過程でどんなに罪を償なおうとしても償えない切れるものではない、だからこそ絶対者・神に縋るしか救いは得られない、と考える。しかし小川は、「死」を完全に癒えた状態、罪を浄化し切った状態と考える。罪は人間が主体となって犯すものであるから、人間の責任において浄化し切れる、と考える。それを導き見守るのが神であり神の言葉なのだ。彼は自力で△治癒▽に向かうのである。そしてこのような小川国夫の人生観は、実は、アウグスチヌスやトマス・アクィナスを経る以前の原始キリスト教にみられるものなのだ。だから、小川はカトリック教徒ではあるが、むしろそれ以前の、パレスチナの地で「生」の意味に喘いでいた原始キリスト教の信者たちの立場に、ずっと近いのだと言うことができる。

とはいっても、小川の考え方が依然としてキリスト教のそれに類似していることは否めない。彼の人生観△癒える▽ということ、を、キリスト教との関係を考慮しながら、「試みの岸」(二つめの系列の代表作、なお、三部作になっているが表題作だけを取り上げる)という作品の中に探っていこうと思う。

山間^{やまあい}で育った十吉は、少年の頃初めて見た海に魅かれて、後年馬喰として海辺にやって来、難破船を買ってひと儲けしようとするが、ならず者たちに「光り物」をすべて剥ぎ取られ、大きな借金を抱え込んでしまう。ある時、老婆ロクが船の鑑札^{けんし}を返してくれたことから、彼女の息子半六たちが犯人であることが判るが、十吉はもう彼らを咎めるつもりはなかった。しかし密告を惧れた半六らは十吉を殺そうとし、十吉は彼らを躲しているうちに過ってロクと半六

を殺してしまふ。十吉は逮捕される……という粗筋だ。

ところで逮捕される直前に、十吉はこう言う。

——不幸になんかならない、という咲の声が聞えた。十吉は、その言葉を信じる気には到底ならなかったが、今の自分に、生きよ、と聞えて来ることには意味があると思った。

——しかし、そいつは俺の決めることじゃあない。不幸だと俺が感じるのが不幸の気でいたが、そんなことはない。苦しうたっている。このまま行つて見るさ。どっかで俺以上に苦しんでいる連中のために、堪えて見せることだつてやつて見せるさ。順次にそういう衆に行き合わせて欲しいもんだ。ロクさんだつてその一人だ。俺は殺しちゃったが……、と自棄^{やけ}氣味に呟いた。

そして手錠が嵌められたときの彼は、「表情は柔和だった。いわば、彼本来の顔をしていた。」と描かれている。まるで、十字架に架けられることによって人間たちを罪から救おうとしたキリストを想わせるような人物像だ。一介の馬喰にすぎない十吉が、いきなり救世主^{メッサー}のような台詞を吐くのは唐突なようだが、注意してみれば、実は彼が、殺人という罪を犯す以前から、「罪」を負った水準以下の人間として設定されていることがわかる。

聖書の中の「光」と「闇」という言葉の使われ方は象徴的である。「光」とはすなわち神の恩恵であり、「闇」とはすなわち神の恩恵の外にあることである。だから信心や愛や栄光や幸福は「光」の内に、不信心や背徳や罪汚れや不幸は「闇」の内にある。ここでは、視覚的な明暗が、そのまま罪を赦された状態と罪を抱え込んだままの状態を表すイメージに応用されている。聖書の中では、悉

く、そうだ。そしてこの、「光」と「闇」のイメージは、小川国夫の文学にもそっくり受け継がれている。また、罪人は、聖書の中では不具者や病人に喩えられていて、これも同様に受け継がれていることも付け加えておこう。「試みの岸」の中で十吉は、顔に疲れを漂わせた「暗い」人間というふうに描かれていて、しかも負傷兵である。十吉が「罪」を負った人間として描かれていることはすぐに判かる。

彼もまだ、船の光り物を剥がれる前は、もっと純粹で明るかった。十吉が馬喰として海に出て来たときのことは、

十吉は一株の夾竹桃を束ねるように、手綱を廻した。馬は頸を振り、頬を水平にして、その葉と花をくわえようとしていた。大きな齒に、淡紅^{うすべに}の花が映っていた。十吉は腕で額の汗を拭いて、——ど、えらく明るいぜ、と呟いた。

と描かれているし、入札が十吉に決ったときの彼の気持ちは、海に新しい見通しを描いていた。今感じている充実した明るさが、まだ残っている金銭の工面や、それに続く労働の中に失われることも、彼は考えないではなかった。しかし、これからは、氣持の張りが苦勞の中を、撓やかな骨みたいに貫いているだろう、と彼は感じていた。

と描かれている。

しかし盜難に遇つてからは様子が変わる。十吉は、自分のせいではないのに、多額の借金を負わされるはめになる。トンネルの中で十吉が窓に写った自分の分身を眺める件は酷く観念的だが、いわば彼はこのトンネルをくぐり抜けることによって「罪」を貼りつけら

れ、「暗ほつたい」人間に变身していく。借金に彼に課せられた負荷の象徴なのである。だから十吉は、殺人という決定的な罪を犯す以前から既に「罪」を負っているものであり、それで、「罪」を浄化して「癒えたい」「人並みになりたい」と常に喘いでいる人物なのだ。

そのような十吉が、殺人という決定的な罪を犯すことによってどう変わっていくのだろうか。ロクたちを殺す少し前に、十吉は架空の対話をする。

——俺に今根を張っているものはなんだ。兵隊という身分は、俺という土に根付きはしなかったのに、俺には別のものが根付いている。原因は船がむくろ同然だっただけか。金銭が無いつてとか。望みが持てないってとか。そうかも知れん。だが、船に値打が甦ったとしても、金銭をそっくり弁償させたとしても、生甲斐を取り戻したとしても、俺に根付いたものは枯れるだろうか。たとえ、俺一人がどんなにいい暮しが出来るようになって、俺を緊めつけているこの根は残りそうだ。正体は判らないが、こいつは俺をとことんまで苦しめそうだ。俺はもてあましている。こんなに俺に触り、こんなに喰い込んでいる。俺は、これからずっと、こいつと附合いをやめることを赦されなくなるだろう。

——とことんまでだれかが苦しんでくれなきゃあ、わしらの苦しみも行き所がありやあせんに。大勢の人間が、わしみたいに、つまらなく生き、つまらなく仕舞わにゃあならん、とロクの声が十吉には聞えた。

——俺だってつまらなく生き、つまらなく死ぬ。お前と一緒にだ、と十吉は彼女の声に応えた。

——お前が、その、とことんまで苦しんでくれるお人じゃあないのかえ。

——俺にはそんな器量はない。手前が可愛いんで、無駄に苦しむだけだ。

十吉は一人でそんな対話をしている自分に気づいて、苦笑した。

この時点では、十吉は、自分に「根付いた」罪を持ち堪えるのが精一杯だった。「とことんまで苦しんでくれるお人」には、なれなかった。

だが、ロクたちを殺して、自分以外の者の手で負わされた「罪」だけでなく、過失とはいえ自ら犯した決定的な罪を負ってしまったと、十吉は、「どっかで俺以上に苦しんでいる連中のために、堪えて見せ」ようと決心するに到る。十吉の心の変化の契機になっているのは、殺人という、どうしようもなく重い罪だ。それまで十吉が負わされていたのは、罪というよりは水準以下であることを示す「負荷」であり、彼に罪を意識させるには曖昧でありすぎた。だが殺人は、罪を意識させるのに充分な重い罪である。罪が重ければ重い程、負の値も大きくなり、△癒える▽ことへの希求も烈しさを増す。とすれば、どうしようもなく重い罪こそ、さ程重くない罪で苛まされ低迷していた人間を、△癒える▽ために生きる、という確かな目的に導くことができるバネなのではないか。ここに、罪こそが人間を救いに導く恵みである、という、キリスト教の、そして小川

国夫の思想が視見されるであろう。罪こそは新しい生き方への確固たる原動力なのだ。

これは、罪なり闇なりという負を、^{マイナス}積極的な意義に轉換してしまふ発想だ。大きな闇を抱えてしまった人間にとって、これ程ありがたい救いはない。しかし実際に轉換できるか否かは、「過程」すなわち「人生」の、歩み方に懸ってくるのである。人が罪を犯し、それを切り捨てるなり消し去るなりしたいと腕く中で、罪こそを逆手にとって、それを浄化するために生きていこうと決心したなら、それへの過程である自己の人生については、自覚的である分だけより多くの困難が付き纏うであろう。しかし、罪を浄化するために生きる、という確固たる目的を持っていれば、それが重い罪から出た切実な願いであれば、彼は生きてゆける筈である。人間にとっての思想とは、そのようなものであらうから。

自己の人生を、水準以下にあると捉えることは、一見消極的なようだが、水準に向かう過程そのものを見れば、それが積極的なものであることは直ちに了解されよう。水準に向かう過程とは、△治癒△に向かう人生に他ならない。十吉は、「どっかで俺以上に苦しんでいる連中のために、堪えて見せる」、というメシアとしての生き方をすることによって、罪を浄化し△治癒△に向かう。逆に言えば、彼が△治癒△するためには、もはやそのような途しか残されていないのだ。

人生を、罪を償い死という救いに到る過程と捉えるキリスト教の考え方と、人並みでない状態から癒えて死という△治癒△に到る過程と捉える小川国夫の考え方は、殆んど重なり合うものだ。彼がキ

リスト教の立場に非常に近いところから文学を著していることには、このような背景がある。そして小川自身にとっては、そのような文学を著すこと自体に、△治癒△に向かう過程としての意味がある。前に引用した「治癒力」というエッセイの中で彼は、「文学というのも、ある一人が癒えたいと思ってやっていることのような気がする。」と述べている。彼にとっての文学的営為とは、△治癒△に到る過程そのものの自己表出なのだ。言うなれば、小川国夫の文学とは、△治癒△に向かって喘いでいる作家自身の姿なのである。

III 小川国夫の「内向」

小川国夫は昭和二年に生まれている。世代という観点からいえば、青少年の多感な時期に、戦争（日本における第二次世界大戦）という公然たる狂気を経験しているのだから、何らかの精神的影響を受けない筈はないだろう。だが、彼の作品を読むかぎり、社会的暴力としての戦争の影は、そこには見い出せない。同世代の他の作家たちが、真正面からあるいは斜めから、戦争の意味を探ろうとしているのに対し、彼は、戦争に関連したいくつかの作品においても、主観を混じえずに歴史的事実としてのみ書く。戦争のことは一つの例に過ぎない。彼には社会を描くという姿勢が見当たらない。「社会性の欠如」というべきか。彼が「内向の世代」の作家と言われる所以でもある。

小田切秀雄が、小川国夫をはじめ古井由吉や黒井千次らについて、「自我と個人的な状況のなかにだけ自己の作品の真実の手ごたえを求めようとしており、脱イデオロギーの内向的、文学的世代として

一つの現代的な時流を形成している。」(傍点小田切、「満州事変から40年の文学の問題」として、「内向の世代」という呼称を与えてから久しいが、これは、彼らの特徴をうまく言い当てていると言えよう。事実、大江健三郎や小田実など、年齢的にほぼ同世代の、同じように戦争を経験した(筈の)作家たちが、社会という現実を見つめてそこから出発している(アンガージュマン)のに対し、小川ら「内向の世代」の作家たちは、社会における人間というものを問題にしていな(デガージュマン)。

ところで、「内向の世代」という見方は、文学の傾向から見たある一つのまとまりと、実際の年齢的なまとまりが、ある基準で一致するという一つの世代論だが、それがなぜそうであるのかという原因を追究する必要があるだろう。ここでは小川国夫の場合について、彼がなぜ「内向」なのか、そしてそれは文学全体の中ではどのような位置にあるのか、ということを考えようと思う。

小川作品には三つの系列があるが、それらのいずれもが、極めて個人の内面にかかわった作品であり、社会という集団としての人間が動かしている現実と直接結びつくものではない(「富士と隔絶される人間性」という自衛隊・公害問題を扱ったルポルタージュがあるが、例外とみていい)。彼は社会における人間というものを、文学の対象にはしていない。

小川国夫に思想(「生」の意義づけという意味で)がないというのは当たらない。人間の「生」というものについて、彼の独自の考え方が、八癒えるVという言葉に凝縮されているからである。彼については、思想は、社会思想であるよりもむしろ宗教の領域に入

り込んでしまっている。宗教が彼のバックボーンになっているのだ。

『或る聖書』(三つめの系列の代表作)という作品にみえる、「荒野衆会」という政治的過激派集団は、権力の、武力による政治的な肅清を目指しており、愛による永遠の平和を願うAあの人Vと対比されて、批判的に描かれている。例えば、Aあの人Vが明るく優しい眼差しをしていたのに対して、荒野衆会の人の顔は「無表情」で「仮面」のようなだと描かれているし、また、息子を殺した(と錯覚した)元Aあの人Vの弟子コイラに向かって語りかける荒野の声の言葉は、「悟らないのか、コイラ、お前が殺したのは子供への愛だ。」である。Aあの人Vが説いたのは愛だったが、荒野衆会では愛を殺さなければならぬ。荒野衆会は政治的な社会改革を目指しているが、そこには愛がないのだ。キリスト教徒である小川が、そのような愛のない政治に加担しないのは当然であろう。

キリスト教の言う愛が、果たして世界を救うものであるか否か、直ちに結論は出せないが、人間が自我^{エゴ}を持っている限り、政治的手段によって社会という器の形を変えたとしても本質的な変革にはならない、ということは言えるだろう。自我^{エゴ}を克服するのが愛だとすれば、キリスト教は本質的な革命を目指している思想だと言えるのではない。小川国夫は、一人のキリスト教徒として、あるいは革命思想が一部空しいものになってしまった時代の申し子として、政治的手段による改革では、人間が生きていくことの苦しみを根源から救うことにはならないのだ、というその限界を、察知していたのかも知れない。

ところで、小川に戦争の影響が見受けられないのはなぜだろう。

私は、小川の場合について言えば、戦争よりもっと大きな「何か」が、彼の心を領していたからではないか、と考える。そしてその「何か」とは、既に肉体の「死」の恐怖を通り越した、「死」へ治癒Vという鮮やかな実感ではなかったのか、と。彼の母まぎの述懐が、それを類推させる。

それから藤枝へも爆弾が落ちて、大分被害が出て、焼夷弾や爆弾の落ちて来る音を聞いたものですから、空襲が身近なものになって恐しくなりましてね。その直後でしたか艦砲射撃があるというんで皆な避難したですよ。ところが国夫はね、

——俺は留守番をしているから、皆などこへでも避難しておくんなはれ、なんて言って動かないですよ。だものですから、その避難した時は夜でしたけどね。枕元に下駄を揃えて置いて、

——あんだ、いいかね。下駄をここへ置くから、これ穿いて学校の道具持ってね。って言ったら、あははあって笑って、

——皆な恐がつている。って、笑うですよ。それでとうとうあの子だけは避難しないで、家で寝ていたんです。

空襲の時にも国夫だけは防空壕へ入りませんでした。私共が入ると笑って見ていましたもの。どこか図太いところがありましたね。空を見ていますと、敵の飛行機が編隊で御前崎あたりから入って来て、藤枝の真上を通過して富士山の方へ行くですよ。それを勘定して、

——飛行機の数も判らないようじゃあ駄目だ。なんて言いながら悠々と眺めていましたね。

（「進級風景」『東海のほとり 評伝小川国夫（一）』）

死の危険が迫っているのに、彼は逃げようと思えていない。爆撃による死を恐れていないのだ。彼はこのとき既に、「死」の意味を悟り切っていたのではないだろうか。

戦争中というのはあれほど物質的には虚妄の時代だったわけです。何もなかったけれども、私の意識の中ではより整っていますね。やがて死ぬんだという考え方を遠くに置いて、なんか整然としたコースを歩いているという感じですね。私にはそれが実感としてあるんですよ。

（「原体験の周辺」）

「やがて死ぬ」ことから、人間は決して逃れることはできないが、普通、それは漠然としか意識されない。だからこそ、人は死を怖れるのだ。だが、自分の「生」が「死」と連続したものであるという意識があれば、現在は「死」に向かって生きている、つまり「やがて死ぬんだ」という考え方を遠くに置いて、なんか整然としたコースを歩いている」のだから、「死」から逃れようとして跪いたりはないだろう。戦争は、通常よりずっと身近に死を意識させる。小川は死の可能性がより濃い戦争という状況の中で、「充実」して生きているのである。

このことは、戦争に遇ったときには既に、彼が「死」を、恐怖を通り越したへ治癒Vとして受け入れていたことを示すのではない。戦争がもたらす筈だった死の恐怖は、彼にとってではや「二度目の麻疹」にしか過ぎなかったのである。小川国夫に戦争の影響が見受けられないのは、戦争に遇う以前に獲得した「死」へへ治癒Vという実感が、既に彼の人生観を決定づけていたからに違いない。

戦争のことを取り上げたのは、それが社会的な暴力として最も顕著なものであり、それを体験し影響を受けたものなら、当然、「社会」の中での人間というものに目を開くようになる、と考えるからだ。戦争によって社会に目を開かれた者は、戦争中に味わわれた人間の苦しみは、権力という人為的なものの運用のされ方に拠るのであり、苦しみから解脱するためには権力の在り方を変えなければならぬ、と考える。つまり、政治による社会改革を目指す。文学の立場でそれを行なおうとする場合、彼は社会の中で生きる人間の姿を、リアルに描くことによって、権力構造についての意見を示唆することになるだろう。社会と文学とのアンガージュマンはこのようにして生ずる。

しかし小川国夫は、戦争という社会的暴力を経験する以前に、 \wedge 癒える \vee ために生きる、という人生観（とはまだ呼べないかも知れないが）を抱いており、「社会」から游離したところで個人の人生を見つめてきた。彼は、人間の苦しみは個人の内部に在り、それは神との関係において増減するものだと思える。だから、人間について考えるなら、自己の内面を見つめるしかないのだ。彼が政治による社会改革を拒絶するのは、彼の、人間の「生」に対する認識が、「社会」派の人たちとまるで異なるからなのだ。人間の苦しみは個人の内部に在るのなら、政治的な方法によって社会という器を改革することには意味が無いのだから。そういう点で小川国夫は正に「内向」しているのであり、デガージュマンの作家なのである。

社会と手を結ぶか、個人の内部に閉じ籠もるか、どちらがいいとも悪いとも言えないだろう。社会改革ということを考えてみても、

権力の在り方を変えたからといってそれを支える個々人が無自覚であればまた同じ様相を繰り返すであろうし、個人の内部に閉じ籠もっていても、いつの時代にも全ての個々人が人間の在るべき姿というものを凝視し続けていれば結果として社会は変わっていくであろうから。小川国夫について「社会性の欠如」が批判として言われているが、それは「社会」派から見れば尤もなことだが、彼が人間の「生」というものを見つめていないということでは決してない。小川に社会改革の自覚があるかどうかは不明だが、少なくとも、自身の「生」のあるいは「死」の意義づけを文学によって著しているということは、彼が、一つの人間の生き方を、提示していることにはなるだろう。彼の描こうとする対象が、「生」と「死」という、論理という梯子では渡ることのできない深淵の向こう、宗教の領域に属していることを鑑れば、作品の、断片的な描き方すら、対象に相応しいものとして受容できる。

文学が、人間の「生」の意味を探ろうとする営みであるのなら、小川国夫の行為も確かに文学であり、遜色はない。彼が社会と手を結ぼうとしないことによって批判されるのだとしたら、それは、対象に対するアプローチの仕方が違うという方法の違いを、一方が明らかにしているということに過ぎない。 \wedge 癒える \vee ために生きる、という彼の人生観は、数ある人生観の中でも特に傑出したもののうちの一つであると私は考えている。

結 び

小川国夫の文学の根幹をなすのは \wedge 治癒 \vee の観念である。既に述

べてきた、言葉に対するファナティズムと沈黙の方法という表現上の問題、十三歳のときの結核からの治癒体験、キリスト教との関係、彼の「内向」の理由と文学における立場——いずれもが、何らかの関連を保有しながら「治癒」Vという言葉を彩っている。

私がこの小論で述べてきたことは、小川国夫という作家の全貌を解き明かすにはあまりにも粗笨に過ぎるが、中心的な一端を示すことによって全体を暗示することができていれば、ここでの目的は一応達せられたことになる。

人間の「生」と「死」を擬視し、 \wedge 治癒Vという観念を抱いて、喘ぎながら人生という \wedge 治癒Vへの途を歩んでいる作家、小川国夫の姿が、見えてはこないだろうか。

(文学部四年)

注記

注1 正確には「ファナティズム」(fanatisme、仏)だが、ここではテキストの表記に従った。

注2 山本恵一郎編(河出書房新社発行『小川国夫作品集 別巻』所収)による。

注3 年齢は満年齢。ただし小川は十二月二十一日生まれなので実質的には一歳。つけ加えておくと、小川は静岡県志太郡藤枝町(現藤枝市)に生まれた。

注4 『東海のほとり 評伝小川国夫(一)』山本恵一郎「休学」にみえる。

参考文献

- 『東海のほとり 評伝小川国夫(一)』山本恵一郎 麥書房
『小川国夫光と闇』吉田精一ほか おりじん書房
『聖書』日本聖書協会
『告白』聖アウグスティヌス(服部英次郎訳) 岩波書店
『満州事変から40年の文学の問題』小田切秀雄 『東京新聞』昭和四十六年三月二十三・二十四日 中日新聞東京本社
『衛生無害のニヒリズム』小田切秀雄 『風景』昭和四十六年十月 悠々会
『内向の世代』考 上田三四二 『群像』昭和四十八年四月 講談社ほか
☆本文ならびに注記・参考文献リスト中、敬称はすべて略させていただきました。